

開かれたアイデンティティー

——仏教の役割を求めて——

河合 隼 雄

自我の確立をめざして

ただ今ご紹介がありましたように、臨床心理学が私の専門です。この臨床心理学というのは、いろいろな悩みを持つた人の相談をする仕事でございまして、いろいろな人の手助けをしている。そこが楽しみの始まりです。

ですから、私は本来禅にも仏教にも関係がない。「先生は禅をやられますか」と聞かれると、「禅は全然知りません」とか、「悪はしてまずけど、禅はだめです」とか言っております。かかしていたんです。ところが、その私が結局のところ、禅とか仏教ということを考えざるを得なくなってきたんです。それは、私の仕事だんだんそれにつながってきたからで

開かれたアイデンティティー（河合）

す。そういうことを今日はお話ししようと思います。

その前に、今日の講演で「開かれたアイデンティティー」という演題を出した理由をお話ししましょう。小淵前首相に頼まれて、「二十一世紀日本の構想懇談会」をやったのですが、そこにはいろいろな分野の人が集まりまして、二十一世紀に日本人はどう生きてらいいのかという話をしたんです。その懇談会がちょうど中間ぐらいにきた時に、みんなで合宿をして徹底的に話し合ったことがあります。社会的なことを考える人もいるし、国の安全を考える人もいるし、教育を考える人もいる。いろいろな分野が違いますが、私は座長でしたから各分野を廻っていたんです。そしてその合宿の終わりの時に、「分野が違えばいろいろな意見が出

るけれども、全部に共通して出てくる言葉は『個の確立』である」と申し上げました。話し合いを通して、日本人はもつと自分の個というものを確立しなくてはだめだということが、非常に強烈に出てきたんです。ただし、個の確立と言いましても、あまり利己主義の方に偏ってはいけません。公の方も大事だというわけで、「個の確立と公の創出」、つまり、個は確立するけれども、公ということも創り出していかなければいけないということを言いました。

ところが、報告書には書いてありませんが、私としてはそういうことをやりながら、ずっと考え続けていたことがありました。私のように臨床心理学を専攻していますと、いろいろな人が相談に来られます。「私は学校へ行きたいけど行けません」という人もあるし、盗みをした人も来るし、極端な場合、殺人をした人も来る。いろいろな人が来られるのですが、そういう人に対して私は何をしているんだろうかと感じるのです。学校に行けない人が学校へ行くようになって、それで本当に成功なのか。盗みをした人が盗みをしなくなれば、それだけでいいのか。そんなことをゆっくり考え始めると、わからなくなる時があるんです。

例えば、学校へずっと行かなかったけれども、詩人として有名になった谷川俊太郎という人がいます。もしもあの人が学校へ行っていたら、よくなかったかもしれない。谷川さんが私の所へ相談に来ていたら、どうしただろうなと思ったりするんです。あるいは、私は臨床心理学の講義でよくベーターベンの例を出すんです。ベーターベンは五十歳くらいになってからも、酒に酔っぱらって自分の家も名前もわからなくなってしまうといひます。おまけに、若い頃には自殺しかけたこともあり、恋愛は失敗ばかり。独身で子供もいませんから、甥を養子にもらったのに、その甥とは喧嘩ばかりしている。でも、こんなベーターベンが普通に恋愛をして、結婚をして、ちゃんとした家に住んで、喧嘩もせずに、平和な暮らしをするかわりに、全然音楽を作らなかつたとしたら、それは成功だと言えるでしょうか。こんなことを考えていると、私は一体何の仕事をしているのかなと考えてしまうんです。いろいろな人を普通にしたら、それで成功なのか。どうしたらいいのかわからない時に、我々臨床心理学を専攻している者がさんざん考えて、ともかくその人には個人として確立してもらおうという結

論になったのです。「自分は作曲をしている」と言うのならば、それはそれで結構だ。「自分は学校へは行かないけれど、一人で勉強して詩を書く」と言うのならば、それも結構だ。そういうことを契機にして、自分で自分のことを考えて、自分で判断して、責任が取れる人間を作ればいいじゃないかと僕は考えたわけです。だから、私が臨床心理学の研究を始めた頃には、個の確立、つまり「これが私だ」ということの確立、心理学の分野で「自我の確立」と呼ぶものをめざしていればいいのだと考えて、一生懸命やってきました。

小さな自我と大きな自己

ところが、そうやって頑張っていると、変なことが出てくるんですね。自我なんか確立してもしようがないということが出てくるんです。例えば、自我を完全に確立している、職業もちゃんと持っていて、家庭も地位も金も何でもある。でも、どうしようもないという人が出てきたんです。むしろ金がない人は簡単です。金さえあればと思うから生きるファイトが沸いてくる。同じように、持ち家が一軒欲

しいとか、あの美しい人を手に入れたと思う人も生きがいを感じています。けれども、そういうものが全部手に入ると、何のために生きていいのかわからなくなってしまふ。もっと恐ろしいことは、今は喜んで生きていたけれど、死んだ後はどうなるだろうと考え始めることです。そんなことを心配し始めた人は、恐ろしくなつて何もする気がなくなつてしまふ。それで、我々のもとを訪ねて来るんです。

私が勉強しました心理学者のユングという人は、自分のところへ来た人の三分の一は何の問題もない人だったと書いています。強いて言えば、それが大問題であつたと言っています。ユングを訪ねて来た人は、アメリカのビジネスマンとか、他から見たら羨ましい方ばかりです。でも、本人はものすごく悩んでいるわけですね。それでユングは、「自我の確立は話の始まりにすぎない。その次が問題ではないか」と考え始めました。つまり、「私はこうするんだ、こうやるんだ」と言っているのは人生の半分にすぎない。あとの半分は、そういう自我がどう死んでいき、どのように自分というものを知るのかということだ。そして、その人

生の後半こそが大事だと言い出したのです。

ものすごく簡単に言ってしまうと、「私は私を知っている」と言うけれども、私が知っている自我なんていうのは非常に小さなものにすぎない。本当の私というのは、もっと大きな計り知れない訳の分からない存在であって、その上に、自我というものがちよつと乗っているだけだ。その非常に大きな、自分でもつかみきれないものを、日本語に訳しておきますが、「自己」と呼ぼうとユングは言います。だから、自我の確立も結構だけれど、本来の自己というのは、いったいどうなっているのか。この追求が人生の後半にあることをユングは見出したのです。

その次にユングが言ったことがおもしろいですね。そのような自己のことなら、東洋の方がはるかによく知っている。東洋人はそれを昔から知り過ぎていたので、自我を確立せずに、心の豊かさや物質的貧困の中に生きています。反対に、西洋人は物質的な豊かさの中で自己を知らずに生きています。だから、西洋人はもっと東洋に学ぶべきだと言ったんです。それで、ユングは何とか東洋のことを西洋に知らせようと思いました。鈴木大拙がヨーロッパで禅の本を出

した時に、その入門を書いたのはユングです。それから、中国の『易経』を翻訳してドイツで出した人がいるんですが、その序文を書いたのもユングです。

でも、ヨーロッパの人々はほとんど聞き入れませんでした。一九二〇年代のヨーロッパですからね。その頃のヨーロッパでは科学が進んで武器が発達して、外国へ乗り出して行って、世界中はヨーロッパのものだと言っていた。そういう状況を横に置いたまま、自己とは何かなんて言ったところで、誰も聞いてくれなかったんです。それから戦争がありまして、日本が負けた。それで、ますます強くなっていくヨーロッパやアメリカと、それを支えるキリスト教こそが中心で、他の考え方は全部間違っている。だから、ヨーロッパ的な考え方で世界を統一しなくてはならないと考えた人が沢山いたのではないでしょうか。

ところが、それに非常な衝撃を与えたのがベトナム戦争です。この戦争で、アメリカは絶対に勝つと思っていたんですね。でも、勝てなかった。それで、アメリカ人がベトナムに実際に行ってみたんです。そこで彼らは考えた。「いたいアメリカ人は何のために生きているのか。我々は正し

いことをしていると思っただけで、どうも怪しいではないか。ベトナムやその周りの国々に行くと、金も何もないけれど、悠々と暮らしている人々がいる」と。ユングはそのことを早くから言っていたんですね。

また、ユングは一九三〇年頃にアメリカを訪ねて行って、当時のアメリカ人達が「あんな無知な奴らはいない」と馬鹿にしていたアメリカ・インディアンに会っているんです。その時に、アメリカ・インディアン、特に老人の顔を見て、「こんなにすばらしい顔をした人は、ヨーロッパにもアメリカにもいない。こんなに素晴らしい顔をした老人がいる」ということは、すごい文化を持っているということだ。反対に、ヨーロッパにもアメリカにもこれだけの顔をした人がいないということは、ヨーロッパ人もアメリカ人も、何とかして金儲けをしようとか、どうにかして何かをしようということに必死になり過ぎていて、本当の人生の目的を考えていないということではないか」と考えた。要するに、みんながアメリカ・インディアンは最低だと思っただ時に、そっちの方こそが最高だと考えたんです。そこで、ユングはその老人に、「あなたは素晴らしい顔を

開かれたアイデンティティー（河合）

しているけれど、いったいどういう生き方をしているのか。その素晴らしい落ち着きぶりの秘密を教えてください」と聞いてみた。すると、その老人が答えて言うには、「太陽が東から昇って、西に沈んで行く。その太陽の運行は、自分達が祈りによって支えているんだ。自分達が祈ることで太陽は昇り、自分達が祈ることで太陽は沈む。だから、我々が祈ることをやめたら、地上は目茶苦茶になってしまう」と。それでユングは、「こんな最高の仕事をしている人が、いい顔をしているのは当たり前だ」と書いています。たとえ会社を作って一億円儲けたところで、太陽が出てこなければどうしようもないですからね。仕事のスケールが全然違う。こういう最高の仕事をしている人は、こういう顔で生きて、こういう顔で死んでいくんだということをユングが言ったんです。そういうことが、一九七〇年代の終わり頃から急にアメリカでもわかってきた。それで、アメリカでもヨーロッパでも、ユングの著作が読まれるようになりました。

エリクソンとアイデンティティー

ところが、ユングの話にはあまりにも東洋的なことが入っている、先程から言っているように、始めのころは西洋ではあまり受け入れられません。その一方で、自我の確立についても少し深いことを考えた人がいます。エリック・エリクソンという人です。この人が、アイデンティティーということを言い始めました。

エリクソンは、私達は自分を確立して、「これが私だ」なんて思っているけれども、本当に私というものは自分の存在の中に根差しているのかと言ったんです。単に判断力があるとか、決断力があるとか、責任があるとか、そういうことではなくて、これまでも私だったし、今も私だし、これからも私だというように、ずっと変わることのないもの。「これが私だ」と、腹の底からポンと言えるようなもの。それがアイデンティティーではないのかと言ひ出したわけです。

そういうことは、アメリカ人もだんだん気付き始めていましたから、一九五〇年代頃からアイデンティティーとい

う言葉がすごくはやり出しました。自我が確立して、金も社会的地位も家族もあつたとしても、それだけではなくて、「私は私だ」とか、「私はこう生きてきて、こう死ぬんだ」ということこそ、素晴らしいことではないかというようになってきたんです。

ところが、このアイデンティティーというものを科学的に説明しようとすると、なかなか難しいんですね。例えば、「私は大学教授です」と言ったところで、大学教授をいつやめるか分からない。「私は父親です」と言ったところで、息子からは父親だと認めてもらえないかもしれない。「私は日本人だ」と言ったところで、もしかしたらアメリカへ帰化してしまうかもしれない。そんなことを言っているうちに、アイデンティティーとは何かということが、だんだんわからなくなってしまう。それで、エリクソンの友達が、アイデンティティーとはどういうことなのかはつきり言ってくれとエリクソンに頼んだんです。そうしたら、エリクソンが、「それは僕にもわからないから言っているんだ」と言ったという、とても有名な話があります。

つまり、科学的に物事をはつきり決めるといふことと、

「うん、そうだ」というのでは、話が違ふということだ。私達は、自然科学と科学技術が発達し過ぎたために、科学技術は信用できるけれども、科学技術でないものは信用できないというふうに思い込み過ぎていてのではないか。科学でも技術でも捉えられないものがあり、そういうものの中にすごく大事なものがあるのではないかということ、エリクソンは言いたかったんだと思います。こんなことが、アイデンティティーというものが考えられてきた背景なのです。

日本人にみられる個の不在

ここで話をガラッと変えましょう。二十世紀日本の構想懇談会では、そのアイデンティティーということを中心に押し出して、むしろ一番古臭いと思われるような「個の確立」ということをガンガン言ったんです。これを、私達は意図的にやった。なぜかと言えば、日本人はあまりにも個の確立がなさ過ぎる。なあなあと、いいかげんにするのがうま過ぎるからです。

ノンフィクション作家の柳田邦男さんが『この国の失敗

開かれたアイデンティティー（河合）

の本質』という本を講談社から出版されていますが、この本を読みますと、個を確立していない日本人のマイナス面がよくわかります。簡単に言ってしまうと、日本人はどれだけ失敗を繰り返してきたのかという内容です。

徳川時代の終わりに鎖国をやめて開国してみたら、ヨーロッパはものすごい文明国で日本は下の方にいた。それで、日本は必死にヨーロッパを追いかけて、やっと追いついたと思ったら、第二次世界大戦でガタンと落ちてしまった。ところが、この戦争を始めた時に、誰が開戦を決意したのか、誰のもとに責任があったのかがわからない。だから、負けた後で誰も責任を取らなかつた。もちろん戦勝国による戦争裁判が行われたけれども、あれは日本人が行ったわけではないんですね。日本人には、誰が悪かったのかわからないんです。もっと甚だしいのは、戦地で若い者に「死ぬ」と言っておきながら、戦争が終わった途端に自分だけ逃げ帰った将校だっていた。でも、その人は何も罰せられていないのです。

あるいは、戦争が終わって五十年もたったら、日本は再び経済的な大国になりました。けれども、その後でバブル

経済が崩壊して、またしてもガタンと落ちてしまった。しかし、バブル経済が崩壊しても、その責任を取っていない人が沢山いるのではないだろうか。要するに、個人としてはつきりと決断し、責任を取るということを、日本人の指導者達は行っていない。みんながそれをごまかしている。柳田さんの結論は、日本国民は失敗から何も学ばないというDNAを持っているのではないかということです。

二十一世紀日本の構想懇談会は、この失敗を二度としないようにしようということが集まったのです。その結果、今度こそ、一人ひとりが自分ということをはつきりと打ち出せるような、そういう人間を作ろうということで意見が一致したわけです。だから、個の確立ということをすごく強調しました。私はこれを何度言ってもいいぐらいだと思います。

ところが、これは難しいことですよ。本当に難しい。確かに、個の確立ということは誰でも言いますよね。学校へ行けば、校長先生が「我が校は、みんなの個性を尊重する学校です。みんなが一丸となってやりましょう」と言う。でも、そんなことをみんなが一丸となってやったらおかし

いではないですか。だから、本当に個性というものを真剣に考えているのか疑問ですね。むしろ日本人が大好きなのは、個性を無視して数字や番号や順番で考えることだとは思いませんか。

私は昔、高校の教師をしていたんです。その時に、クラスの子供を一人ひとりよく見て、覚えていて、その生徒の親が来れば、「お宅の子供さんは、この間バレーボールで大活躍しましたよ」とか、「お宅の子供さんは、なかなか茶目っ気があって人気者なんですよ」とか言うのだけれど、たいていの親は聞いていない。それよりも、「うちの子供は何番ですか」ということの方が気になっている。それで、「お宅の子供さんは、この前の試験では一五番でした」と言うのと、「わかりました」と言って、その番号だけを覚えて帰られるんです。

でも、番号というのは、個性を無視するということです。そして、日本ではそういうシステムができあがっている。だから、日本ではみんながだんだん個性を摩滅していつて、とことん摩滅した人が、所長とか校長とか、「長」という名がつく指導者になっていくんです。

グローバリゼーションと個の確立

皆さんもご存じのように、これからはグローバリゼーションの時代だと言われています。でも、グローバリゼーションというのは、世界が一樣になることではなくて、世界がしつかりつながっていることなんです。ところが、そのつながる方法が、日本とアメリカとはまったく違っている。

昨日、岐阜で行われたシンポジウムの席上で、前の駐米大使の小和田恒さん、雅子皇太子妃のお父さんとお話しをしたんですが、その時、小和田さんがこんなことをお話しされました。アメリカへ行つて、アメリカ人と会議を行う時には、英語でパーツと議論をして結論を出す。ところが、その結果を日本へ持ち帰つて外務省で報告する時には、人間が変わっていないなければならない。英語の考え方のままで話したところで、誰も聞いてくれないんですね。英語で決めたことを、日本的に言い換えなければいけない。人間の姿勢まで変わらなければならないのです。

では、どう変わるのでしょうか。二十一世紀日本の構想懇談会の時に、会議室へ一番最後に入ってきた総理大臣が、

開かれたアイデンティティ（河合）

「いや、皆さん、すみません」と言われたんです。そして、私の横に来てから、また「河合先生、座長ですね。いや、すみません」と言う。日本では、こうやって「すみません」と言うことで、自分というものをスッと消して、そこからまわりとのつながりが始まります。ところが、アメリカではそんなことは絶対にありません。アメリカでは、まず始めに私というものがしつかりとあつて、その私と私との間でつながりが生まれていく。こういうふうには、日米の間には大きな違いがあるんです。

もう一つの例を挙げると、英語では「I am」とか「I think」とか、主語になるのはすべて「I」です。それに比べて、日本語では「私」とか「僕」とか「俺」とか、周りの状況によつて主語を変えますよね。今ここで「私は」と言っている私が、家に帰れば「わしは」と言うし、喧嘩の時には「俺は」と言うし、冗談を言うときには「拙者は」なんて言ってみたりする。このように、日本では場の中から私が出てくるんです。立っている場を感知して、その場の中で私というものをスッと出してこなければならぬんです。だから、私が今何気なく話している言葉を通して、

皆さんは私がこの場をどう考えているのかということを感じ得られるわけです。ところが、英語の場合は「I」ばかりです。そのために、アメリカ人やヨーロッパ人は利己主義だと言う人がいますが、これは大きな間違いです。

これからのグローバルバリエーションの時代には、外交官を通して国と国とが交わる以上に、皆さん一人ひとりがインターネットなどを通して外国と付き合うことになりますね。その時に、「私は」ということで、パッと通じるような「個」というものがある程度持っていなければ、日本人はほとんど失敗することになる。今までも、日本人は実際に、外交でもビジネスでも学者の世界でも、そういう点で随分損をしたり、誤解をされたりしていると思います。だから、個の確立ということを、二十一世紀日本の構想懇談会ではあれほど強調したんです。

ところが、そこですぐに出てきたのが、そんなことばかり言っていたら日本人のアイデンティティーはどこへ行くのかという批判でした。日本人は日本人なんだ、日本人がアメリカ人と一緒になる必要はないではないかという考え方なんです。でも、私が言っているのは個を確立すると

いうことなんです。先程、エリクソンがアイデンティティーとは訳がわからないものだと言ったという話をしましたが、私が好きなエリクソンの言葉の中に、「アイデンティティーとはこういうものだと言えるようなものではない」というものがあります。むしろ、生涯にわたって続く無意識的な成長の過程、プロセスこそがアイデンティティーであるという言い方をしているんです。つまり、「私が私だ」ではなくて、「私はこういうものだ」ということを、一生にわたって作っていくということです。そして、私のアイデンティティーがはつきりとわかるのは死ぬ時になる。そのくらいのもつりでないければならないのです。

だから、ここに日本人のアイデンティティーというものがあるって、それに何かをパッと継ぎ足そうというのではない。そうではなくて、日本人のアイデンティティーをみんなで作っていくということなんです。その時に、西洋人の言っている個の確立というのは、すごく大事なのではないか。個の確立ということを考えながら、日本人としてどう生きていくかを考えましょうということなんです。

無我を説く仏教

こういうことを言いますと、「ああ、わかった」と思うのですが、実際はすごく難しい。なぜかと言えば、先程から言っていますように、日本人はむしろ個を確立しないように生きてきたからです。そして、この考え方は仏教の中ではますます強いものになってきます。

私は仏教の勉強をあまりしたことがないんですが、子供の時に読んだ仏教説話の中に、ものすごく印象に残っているものがあるんです。それは、ある旅人が小屋の中で雨宿りをしていて時のことです。一匹の鬼が死体を担いでその小屋に入ってきた。そして、鬼がこれから死体を食べようとしているところへ、もう一匹の鬼がやって来ました。すると、後から来た鬼が、「この死体は俺のものだ」と言い出したんです。最初の鬼が「この死体は俺が運んできたものだ」と言い返しますと、後から来た鬼が「どこにそんな証拠があるんだ」と言い張ります。それで最初の鬼が、震えている旅人に向かって、「我々二人の中で、この死体を担いだできたのはどっちなのか言ってみろ」と聞いたんです。旅

開かれたアイデンティティー（河合）

人は怖いけれども本当のことを言わないといけないと思つて、「こちらの鬼様が担いで来ました」と答えた。

すると、後から来た鬼が怒つて、旅人の右手をちぎって放り投げてしまった。旅人が「痛い」と思ったたら、すかさず最初の鬼が死体の右手を旅人につけてくれたんです。助かったと思つた瞬間に、今度は左手をちぎられ、すぐにまた死体の左手をつけられた。同じようなことを次から次へと繰り返しているうちに、旅人の身体はすっかり死体のもので入れ替わってしまったんですね。そのうちに鬼も疲れてきて、この死体を半分ずつ食べることにしようということになって、食べ終わると二匹の鬼は出て行ってしまった。

旅人は「助かった」と思つたけれど、自分が誰なのか分からなくなつてしまいます。自分は前からいた旅人なのか、それとも、死んでいた死体なのか。そこで、この旅人は偉いお坊さんの所へ行つて、「私は元からの私ですか、それとも死体ですか」と尋ねるんです。その時にお坊さんに何かを言ってもらつて、「あ、わかった」と思うことがあるんです。お坊さんが何を言つたと思いますか。その答えは、「私などというものは初めからなかったのだ。心配しなくても

いい」というものだったんです。要するに、仏教的に言えば個の確立というものはない。私などというものは、そもそも存在しないというのが仏教の捉え方なんです。

普通とは違う意識の世界

ところで、仏教といえば、あるお経を読んできてとても眠たくなったことがあります。似たような菩薩の名前が次から次へと並んでいて、その上、同じようなことが何度も何度も繰り返して書かれている。眠くなって当たり前ですよ。でも、「これはすごいな」と思った瞬間に、私はハッとわかったんです。お経というのは読むものではなくて、唱えるものなんです。しかも、鳴り物入りで唱えますから眠られないんです。うまくできていますね。何とかかんとか唱えていって、だんだん眠くなってきたところにゴーンと鳴るんですから。

でも、これはいったい何をしているかわかりますか。実はお経を唱えることによって、普通の意識とは違った、別の意識の方にだんだん変えていっているんです。普通の意識というのは、皆さんが今持っている意識のことです。こ

こに一輪の花があれば、花は花だし、花は一つしか見えな
いし、花の色はその通りの色でしょう。でも、意識が変わっ
てくると、これがだんだん違った世界に見えてくる。

例えば、私がここで梅干しをガリガリ食べ始めれば、そ
れを見ているだけで唾液が出る人は沢山いると思います。
あるいは、誰かがここで足をバンツと蹴られれば、それを
見ている「痛い」とか「ギョーッ」と思う人はいっぱい
いると思います。「この人が足を蹴られているだけじゃない
か」と考えて、フーンと見ていられる人は非常に少ない
はずです。これは、私と皆さんがつながっている。ある
は、足を蹴られた人と、それを見ている人がつながって
いるからなんです。そのつながっている状態を、もつとつな
がっている意識で見ようとする。それが、普通の意識
とは違う別の意識ということ。坐禅をするということ
は、そういうことをやっているのです。

その時に、今言いましたようにフワーとした感じでやっ
ていると、眠たくなって意識が不明瞭になってしまいます。
それではだめなんです。意識はだんだん変わって行くけれ
ど、明晰でなければいけない。明晰性を失わずに、意識がど

んどん変わって行くと、いろいろなものが一緒になって、つながっている世界がはつきり見えてくる。そうやって、ずっと意識を下げていって、しかも明晰性を保っている、すべてのものが融合してくるんですね。そして最後には、「花」とか「河合」とかいうような名前もついていない、「存在」そのものの世界にまで降りていく。それを明晰に認知できるようにするんです。反対に、その「存在」そのものが普通に現れてくると、花というものになって現れてくるし、河合というものになって現れてくる。井筒俊彦という哲学者がそういうことを書かれています。

西洋流に言えば、「ここに花が存在している」とか「ここに河合が存在している」ということを、東洋的な意識で表現すれば、「これは存在が花している」とか「これは存在が河合している」ということになる。これを、「存在 (Being) はフラワリング (Flowering) をやっている」とか、「存在 (Being) は今、河合イング (Kawain-g) をやっている」というふうな英語で話すと、外国の人達は喜ぶんですね。西洋では「花が存在する」と言いますから、「存在する」という方が述語になって、「花」が主語になっています。ところ

開かれたアイデンティティ (河合)

が、東洋的に言うと「存在」の方が主語になってくるわけです。

そうすると、物事を観察する態度も変わってきます。「河合が花を観察している」という西洋流の態度が、東洋流に言えば「あなたは花してますね。私は河合してますよ」ということになる。そうすることで、花と河合とが一步近寄ることができるようになります。要するに、世界を見る見方が西洋と東洋では随分違ってきます。西洋では世界を切り刻んで見るのに対して、東洋では世界をつなげて見る。まったく正反対なんです。

西洋で発展した自然科学の考え方は、世界を切り刻んで花を観察し、花を切り刻んで分子を観察し、分子を切り刻んで原子を観察し、原子を切り刻んで電子を観察するといふやり方です。世界を操作するには、こういう考え方が有効ですね。だから、世界をスッパリ切ることを根本とする科学技術が世界中を席卷してきたわけです。

ところが、先程も言いましたように、我々は科学技術だけでは暮らすことができない。例えば、交通事故のために自分の恋人が目の前で死んでしまったという人が私のところ

ろへ来られました。その人は、完全に気持ちが沈んでいて、生きていく気持ちもなくなっています。その人が、「なぜ、あの人は死んだのでしょうか」と聞かれるんです。

これに対して、自然科学では簡単に答えることができませんね。「あれは出血多量でした」と答えればいいわけです。けれども、それではその人が聞きたいことの説明になっていない。その人は、「なぜ、私の恋人が」ということを聞きたいんです。つまり、関係の中で答えが欲しい。でも、関係の中で答えるということをも自然科学はやらないんです。

もつと極端に言うとも、私の死を自然科学は説明できない。私はなぜ死ぬのか、いかに死ぬのかという問題を、自然科学が説明することはできないんです。このことを、柳田邦男さんがしばしば強調されています。自然科学や科学技術は、三人称の死、つまり、人間が死ぬということを語ることはできる。ところが、二人称の死や一人称の死を語ることはできない。それは、宗教にしか語ることができないのです。そうすると、そうしたつながりの中で物事を考えるという仏教的な考え方は、とても素晴らしいことなのです。ものすごく洗練されているんです。

仏教の世界と臨床心理学

私の専門は臨床心理学ですが、アメリカやヨーロッパへ行った時には、臨床心理学の分野でしばしば仏教の話をしています。それはなぜかという、臨床心理学というのは人間とつながっていないなければならない。相談に来られた人の話を聞いている時の私の態度は、坐禅や瞑想をやっている人と非常に近くなっていると思うからです。つまり、相手と私が一緒になって、つながっている世界の中で話を聞いている。

先程言いましたように、「なぜ恋人が死んだのでしょうか」と聞かれた時に、「出血多量です」と言ったところで答えになっていない。それよりも、この人が恋人の死を悼んでいるならば、私も一緒に悼むことの方が大切なのです。臨床心理学というものは、相手と一緒にあって、ある関係の中で世界をどのように見ていこうかということをやっています。ですから、仏教的なものの見方や考え方のほうは、すごくおもしろいのではないか。最近、外国へ行ってこんな話をする、みんなが関心を持って聞いてくれます。

例えば、ある人が相談に来られて、「私は学校へ行っていない。嫌でしょうがないんです」という話をされた時に、たいていの人は「なぜ学校へ行かないの」とか、「学校のどこが嫌いなのか」というふうに、すぐに聞いてしまいます。でも、そんなことがわかるくらいなら、学校へ行っているんですね。自分でも、なぜ行っていないのかわからない人がたくさんいるんです。ところが、「なぜかわからないけど、学校へ行っていない」と答えると怒られるから、無理にでも理由を言おうとする人がいます。けれども、何か理由をつけてみたところで、その理由が解消されれば学校へ行けるとは限らない。だから、私達は相談に来られた人が「学校へ行っていない」と語るのを、ただぼんやりと聞いているだけです。それならどうするということを、ほとんど考えずに聞いているんです。先程も言いましたように、我々の意識のレベルをどんどん下げて行って、深い所からも一度考えなおそうという態度で聞いています。しかも、明晰性を失ってはいけません。ここが難しいところなんです。下手をすれば眠ってしまう。相手の話を聞きながら、眠ってしまうすれすれのところできずと一緒にいるわけです。

開かれたアイデンティティー（河合）

ですから、普通の人が見れば不思議に思うかも知れませんが、「もう死にます」と言われて、「はい」と聞いているだけですし、「私は生きていても仕方ありません」と言うのを、「はい、はい」と聞いているだけです。そうやって、ずっと聞いていると、「もう死にます」という所まで落ちて行った人が、「やっぱり生きよう」というようになるんです。しかし、この「やっぱり」が出てくるまでには、かなり下がって行かなければいけません。

その時に、「もう死にます」と言う人を前にして、その人との関係が切れたままで、「あつ、そう、死んでくれ」と言っては絶対にだめです。「もう死にます」という人と一緒に下がる下がる行かなければいけない。でも、一緒に下がって行く時に、次は上がろうとか下がろうとかいうことを考える必要はない。相談に来ている人が話し始めたら、その人の世界に入っていくだけです。そういう態度を、私は長い間の訓練を通して、ようやく身につけてきたんだと自分では思っています。

そうは言っても、あんまり話をしない人が来たらどうするんだと思われるかも知れませんが、実際に、高校生くら

いの人は話ができないんです。あれは、別に隠しているわけではなくて、自分でもうまく話せないんです。そういう人は、「僕は高校二年生です。学校へ行っていないよ」と言っただけで、黙ってしまいます。そうすると、その人と一緒にいることは、なかなかできるものではありませんよ。こちらから話しかけてはいけないとか、自分は黙っているうちはいけなないと考えて、相手に合わせて黙っているうちに、「今日の昼飯は何にしようかな」なんてことを考えてしまふことだってあります。心がよそへ行って、その場になくなってしまふんです。でも、これではいけません。その場で、ずっと沈黙したまま一緒にいなければいけないのです。

ところが、やはりこちらも人間ですから、いつまでもじつとしていられない。そうになると、心がどこかへ行ってしまうくらいならば、何か話をした方がいいというわけで、「高校二年生でしたね」などと言ってみます。同じことを繰り返して言っているだけです。

これは、なぜだかわかりますか。下手な人ほど、相手が話していない世界に飛び出して行ってしまふからです。例

えば、「高校二年生ですが、学校へは行っていません」と言われて、「ああ、そうですか。お父さんの御職業は何ですか」なんて聞いてしまいます。そして、「父親は大学教授です」という答えが返ってくると、「それは大変ですね。大学教授ではあなたの気持ちがわからないでしょうから」などというように、勝手に物語を作ってしまうんです。人間にとつては、自分で自分の世界を作る方がはるかに楽なことです。でも、それではいけないのです。相手を同じ人間だと思つて、ずっと一緒にいることが大切なのです。

しかし、その後もやはり会話にはなりません。しばらく沈黙が続きます。そんなことをグニャグニャやっているうちに時間が来てしまいますから、「来週来られますか」と聞いてみるんです。どうせ来ないだろうと思つてみると、ニッコツとして「来ます」と言うんですね。「へー、こんなカウンセリングでも来るのかなあ」と思つていたら、その生徒のお母さんから電話がかかってきました。それによれば、その生徒はいつになく晴れやかな顔をして帰つて来たそうです。そして、お母さんが「今日あなたはこういう人に会つて来たの」と聞いたたら、「あれだけ高校生の気持ちが分かる

人はいない」と答えたというんです。おもしろいですね。こちらは何もわかっていない。わかっていることといえば、「高校二年生で、学校へ行っていない」ということくらいです。

けれども、その生徒が言いたかったことは、「自分の心をそれだけ大事にしてくれる人は、ほかにはいない」ということだったのでしょう。ですから、その人を大事にするということは、その人の心の中に手を突っ込まないということなんです。「なぜ学校へ行かないの」とか、「お父さんのお仕事は」というように、一番手を入れて欲しくないところへゴチャゴチャと手を突っ込んでおきながら、自分はその人のためにしているんだと勘違いしている人が沢山いますね。でも、私達はそれを絶対にやりません。それはなぜかと言えば、私達の仏教的教養の影響が大きいからだと思えます。明晰性を失わないで、意識のレベルをずっと下げて行くことで、相手とずっと一緒にいることができるからです。

開かれたアイデンティティー（河合）

和魂洋才と「開かれたアイデンティティー」

このようなことを考えていきますと、日本人は日本の伝統の中にいるのだから、日本の仏教的な考え方を持っている。けれども、アメリカ人と議論する時には、日本人も個を確立して自分の意見を言える人間になる必要があるのではないかという考えが浮かんできます。そんな器用なことではないと言う人がいるかもしれません。でも私は、それができると思っています。非常に難しいことは事実ですが、何とか頑張ってやってほしい。私自身も、それほど上手ではありませんが、できる限りそうすることを心掛けています。

自分の持っている東洋的、日本的、仏教的な素晴らしいものを大切にしながら、西洋のよい部分をどんどん取り入れていく。そうすることによって、自分のアイデンティティーを死ぬまでかかって作っていく。私のアイデンティティーとか、日本人のアイデンティティーというのは、こういうものとか、こうあるべきだなどというものではありません。一人ひとりがどうやって生きていくかという

開かれたアイデンティティー（河合）

ことにこそ、本当のアイデンティティーがある。私はそれを「開かれたアイデンティティー」と言っているんです。

二十一世紀日本の構想懇談会の最後の結論は、「立ち向かう楽観主義」という表現になりました。立ち向かっていくのではないか。立ち向かっていく限り、日本は心配しなくても大丈夫だ。そういう楽観を持ちながら、それでもなお立ち向かっていくという意味で、「立ち向かう楽観主義」と言ったのです。

これを、私流に言えば「開かれたアイデンティティー」ということになります。さらに、それは明治時代に掲げられた「和魂洋才」に通じます。日本の和の魂を大切にしながら、西洋の才、つまり、自然科学や科学技術を取り入れていく。この「和魂洋才」という考え方は、和魂というものが最初にあって、その上に洋才をポンと乗つけることだと考えている人がいます。でも、それは間違いだと私は思っています。そもそも和魂というものは、始めからきっちりとしているものではなくて、だんだん作り上げていくものではないのか。

そう考えていましたら、『源氏物語』の中に、すごくおも

しろいことが書いてあったんです。主人公の光源氏が、漢詩や漢文の勉強をさせるために自分の息子を大学に入れるんです。すると周りの人達が、光源氏の息子ならば確実に出世できるのだから、無理に勉強する必要はないではないかと言います。その時、光源氏が言った言葉が「和魂漢才」。その上で彼は、「漢才をもつて、大和魂を磨かなければならない」という、とても大切なことを言っているのです。

私はそれを知って大変うれしくなりました。現在の我々が「和魂洋才」ならば、洋才で和魂を磨こうではないか。つまり、自分は最初から決まりきった和魂を持っていて、そこに新たな洋才を継ぎ足すのではない。自分の持っている和魂がどういふものかはわからないけれども、その和魂を洋才で磨いていく。磨き上げるとどうなるのかもわかりません。それでも、磨いていこうではないか。死ぬまで磨いていこうではないか。そんなふうに、私は考えるようになったのです。

そして、私は和魂洋才を考えているけれども、洋魂の人は反対に、もう少し和才で磨いた方がいいのではないか。

そう考えて、私は外国へ行くとは仏教の話をするんです。「日本では、皆さんとは全然違う考え方がありますがけれど、これはどうですか」とか、「私は仏教的な考え方を臨床心理学に取り入れているんですが、これが結構役に立っているんですよ」というわけです。

私は、これこそが本当のグローバリゼーションだと思えますね。アメリカの人にもヨーロッパの人にも、もっと東洋のことを知ってほしい。それは、かつてユングが行ったことですけども、それをもっとやってほしい。そうすることです、彼らは和才で洋魂を磨く。我々は洋才で和魂を磨く。そのように考えることが、閉じられたアイデンティティーではなくて、開かれたアイデンティティーなのだ。私は思っています。

(本稿は、平成二二年一月四日の禅研究所開所三十五周年記念行事における、河合隼雄先生の御講演を、編集部にてまとめたものです。)

開かれたアイデンティティー (河合)